

序章

こんな時代に子どもを大事に育てる
ということをめぐる

青山学院大学教授 樋田大二郎



序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

資料編

こんな時代に子どもを大事に育てる ということをめぐる

青山学院大学教授 樋田 大二郎

「子育て生活基本調査」の特徴は規模の大きさのほかに、経年変化をみられること、小1～中3生までの学年別変化をみられること、心理学・社会学・教育学などの多様な視点から子育てをとらえられること、そして子育てのリアリティをとらえようとしていることである。これらの特徴が今日の母親が子育てを楽しむ姿や不安を抱えている姿をありのままに描き出した。

1. 母子のふれあい時間は長い

30歳代の夫婦と子ども世帯の場合、育児時間は平均で28分だという(総務省『平成18年社会生活基本調査』)。しかし、親子のふれあいは育児時間だけではない。われわれの調査では、親子が一緒に過ごす時間に着目した。まず、一緒に過ごす時間をたずねた結果(平均)では、小学校低学年で6時間48分、中学年6時間28分、高学年で6時間09分、中学生の母親でも5時間19分であった(p.41 図2-3-3)。また、小学校低学年に焦点を当てると、放課後で時間帯ごとの母子が一緒にいる比率が7割以上になるのは、17時頃からで、21時頃までであった(p.39 図2-3-1)。母子のふれあい時間は非常に長い。なお、小学校段階では15時頃～18時頃で母親の就業状況によって、母子が一緒にいる比率に大きな差異があった(p.39 図2-3-2)。

2. 母子のふれあいは楽しい時間

育児は楽なことではない。しかし調査結果では、母親は子どもと一緒にいることを喜びや楽しみとしている。「子育ては楽しい」が87.4%(基礎集計表)、「子どもが成長したと

感じる」が97.3%、「子どもをもつことによって自分自身が成長したと感じる」は87.9%といずれも高い値になっている(p.49 図3-1-1)。実際のふれあいのようすをみると、「子どもと趣味や娯楽について話をする」は92.0%(p.49 図3-1-1)、「子どもと一緒に遊ぶ」も小学校低学年が79.8%、中学年が72.4%となっている(基礎集計表)。

3. 大事に育てる別の理由

ふれあいが楽しいのだから、当然子育てを大事にしている。ただし、大事にするのは別の理由もある。将来への不安と学校教育への不安である。

現時点の経済状況についても、将来の経済状況についても母親は楽観的ではない。現時点の経済状況は4段階の選択肢で「あまりゆとりがない」と「ゆとりがない」の合計は49.7%におよぶ(p.10 図C-4)。さらに、将来の経済状況は5段階の選択肢で「よくなりそう」と「どちらかといえばよくなりそう」の合計は13.9%でしかない(p.10 図C-5)。

そのようななかで、学校教育に子どもの未来を託したくなくなったとしてもそれは難しい。確かに、近年、母親の学校満足度は高まる傾向にある(p.103 図6-2-2)。にもかか

ならず、塾や習い事の利用率は高まっている (p.78 図4-4-2)。こうした一見矛盾する傾向の背後には、母親は学校の頑張りや認められるものの、多くは期待できないことを知っているということがあるのではないか。教育の質向上と多様性をはばむ根本原因は、日本の公的教育投資額の少なさである。2008年の学校教育費(公的支出)の対GDP比は3.3%であり、比較可能なOECD諸国31か国中で最下位である(中央教育審議会(第78回)配付資料)。教育によって子どもの可能性を広げたい母親は、公的負担の少なさを感じ取っているので、私費負担する道を選ぶ。本調査の結果では、塾と習い事の高い利用率がわかった(p.78 図4-4-2)。また「子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと不安である」と不安を訴える母親の比率が50.2%に達している(p.61 図3-3-1)。

4. なにかと悩む母親と受験に悩む母親

「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」と回答した母親が47.7%いる(p.69 表4-1-1)。社会的地位達成や経済的成功だけが子どもを幸せにすることではない。そのことは母親もわかっている。母親の多くはさまざまなことに関心をもっている。食と環境の安全・安心、優しくてたくましい心身、社会性・倫理性・道徳性、コミュニケーション能力、職業生活や市民生活の準備、そして学歴獲得にも不安を抱いたり関心をもったりしている(第1章)。

ところで、学歴獲得のためには教育産業を利用せざるを得ない部分がある。しかし教育産業の利用はやがて依存に代わり、受験以外の関心が後回しになることが多々ある。

5. 子育て戦略を意識する母親

しかし、われわれの調査結果は、受験にの

めり込まずに、子どもを大事に育てる戦略や戦術に長けている母親の姿を示している。

かつては父親が中・長期の戦略構築を担い、母親が短期的・実践的な面倒見を担うというイメージがあった。今は夫婦で戦略を練り、夫婦で面倒をみる。余談だが担えないから夫婦で意見が食い違うことも起きる(p.61 図3-3-1)。

共感や安らぎ、喜びは競争の外にあることは誰でも知っている。しかし、母親は教育関係者がささやく「不安の罟」に取り込まれがちである。「子どもの教育・進学面では世間一般の流れに乗り遅れないようにしている」が57.2%に達している(p.61 図3-3-1)。このようななかで、前述のように「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」(p.69 表4-1-1)と答えた母親が半数近くいたのは、驚きとともに安堵を感じる。

母親はアクセルを踏んだり、ブレーキを踏んだりを使い分けているようにみえる。たとえば、子どもの学習に介入したり手助けをしたりする母親が増えている(p.91 図5-2-1)。しかし他方で、子育て全体の戦略にも関心を払い、勉強以外の側面で「あいさつやお礼ができるようにしつけている」が98.1%、「自分でできることは自分でするようにしつけている」も95.7%となっている(p.55 図3-2-1)。

社会不安と競争とで混乱する日常のなかで、夫婦で協力し、アクセルとブレーキを使い分ける。そのことが子育ての分担化や依存化からの脱却を可能にし、楽しいふれあいの時間づくりを可能にする。子育てを楽しめる時代が開かれつつあるのではないか。

最後に今回の検討では触れなかったが、家族崩壊・貧困などの問題を抱える母親が困難な子育て環境にあることは忘れてはならない。